

子どもと女性の健康相談室

30



福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター教授
横山 浩之氏

今回は話題を変えて、子どもの行動異常に対する薬物療法のことをお伝えします。文部科学省の調べによると、暴力行為やいじめなどの行動異常を示す子どもが増加しているそうです。特に小学校低学年での増加が際立っているそうです。周りも困ってしまうような行動異常があると、病院に行って薬をもらってきてもはと言われたりするようですが、暴力行為を治す薬剤はありません。こういったところ、子ども

の行動異常に対する薬物療法のことをお伝えします。文部科学省の調べによると、暴力行為やいじめなどの行動異常を示す子どもが増加しているそうです。特に小学校低学年での増加が際立っているそうです。周りも困ってしまうような行動異常があると、病院に行って薬をもらってきてもはと言われたりするようですが、暴力行為を治す薬剤はありません。こういったところ、子ども

偏見なくし自立促す

での治験も積極的に行われるようになりました。その背景には、技術の進歩により薬剤がどのように効果を上げるかが分かってくることもあげられた。例えば、自分の目を突いてしまうといった自傷行為があるため、ぽーっとさせておくしか手がないので薬物を使うといった具合です。

する報告も数多く出され、メチルフェニデートなどのAD/H D治療薬が脳の発達を促す作用があるのではと言われてきています。これらの報告を受けて米国小児科学会は二〇一一年のAD/H Dガイドラインで、四歳から心理的介入を開始し、無効な場合には薬物

思考や創造性を担う前頭前野にドパミンやノルアドレナリンを運ぶ投射線維の減少が示され、メチルフェニデートは足りない神経伝達物質を補って行動を改善することが分かっています。先に述べたような偏見をなくし、子どもの自立につながる治療をしていきたいと思えます。

このように小児の行動異常に対する薬物療法は、少しずつ進歩しています。先に述べたような偏見をなくし、子どもの自立につながる治療をしていきたいと思えます。

二〇〇〇年代に入り、早期診断して薬物療法を行うことで投射線維が増加

二〇〇〇年代に入り、早期診断して薬物療法を行うことで投射線維が増加

動物実験から、AD/H D

行動異常と薬物療法

突いてしまうといった自傷行為があるため、ぽーっとさせておくしか手がないので薬物を使うといった具合です。

一九九〇年代半ばから状況が大きく変わり、小児での安全性試験や小児

一九九〇年代半ばから状況が大きく変わり、小児での安全性試験や小児

一九九〇年代半ばから状況が大きく変わり、小児での安全性試験や小児